

「ナルボンヌの祭壇」碑文 (CIL XII, 4333) 再考

山本晴樹

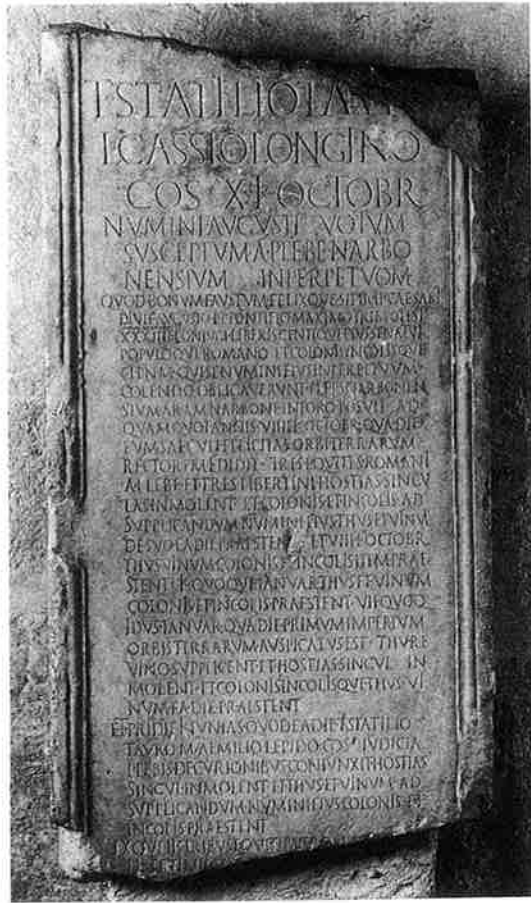
今日のフランス南部に位置し、スペイン・バルセロナ方面とトゥールーズ・ボルドー方面の分岐点にあたる場所にナルボンヌという町がある。現在では一地方都市にすぎないが、ここはかつてローマ共和政末期・帝政初期にはこの地域の首都であった⁽¹⁾。しかし、その後の破壊により、ローマ期の繁栄を偲ばせるものは地表にはほとんど残されてはいない。ただ碑文史料はさすがに豊富である。なかでもローマ皇帝礼拝に関してはほかには見られない重要なものが残されている。それはこの考古博物館に収められている。その博物館には「皇帝礼拝の間」とよばれる展示室があって、部屋の中央部には《PACI·AVG》の銘をもつ見事な祭壇が置かれている⁽²⁾。また中庭を望む窓際の壁にはもうひとつの祭壇が固定されている。有名な「ナルボンヌの祭壇」(Ara Narbonensis)である⁽³⁾。

これは祭壇と呼ばれてはいるが、形状は石碑に近い。というも、正面、右側面こそ碑文が彫られ表面が加工されているが、左側面はほとんど手が加えられおらず荒削りのままであるからである。明らかにこの祭壇の左側および裏側は何らかのものと密着していたと思われる。かつてフォルム(中央広場)⁽⁴⁾に設置されていたのであるが(後述)、おそらく一つの区画の右端に置かれていたものと思われる。

この祭壇は、アウグストゥスの生前(11年)に彼のヌーメン(numen)⁽⁵⁾に対して奉獻されたものとして名高いものである。筆者はかつてこの「ナルボンヌの祭壇」正面と右側面に施された碑文をとりあげ、とくに論争になっている箇所解釈をめぐる学説の整理を試みたことがある⁽⁶⁾。その際この碑文の全体的な考察は残されたままであった。

この二つの碑文はまたアウグストゥスの生前での彼に対する礼拝(皇帝礼拝)の開始を示すものとしても知られている。その皇帝礼拝に関する研究は現在一層の深まりをみせており、いまやローマ帝政期の重要な研究テーマとなっているといっても過言ではない⁽⁷⁾。このような研究状況のなか、あらためて「ナルボンヌの祭壇」碑文を取り上げ、この地における皇帝礼拝の生成の状況をみてみたい⁽⁸⁾。

ここに一葉の写真(写真①)があるが、これは「ナルボンヌの祭壇」の正面碑文を写したものである⁽⁹⁾。これをもとに正面碑文をみとめることにしよう⁽¹⁰⁾。



写真① CIL CHÉNÉ, RÉVEILLAC
CNRS Centre Camille-Jullian
MMSH Aix-en-Provence
n°123233

1. T. Statilio Taur[o]
2. L. Cassius Longino
3. cos., X k(alendas) octobr(es)
4. numini Augusti votum
5. susceptum a plebe Narbo-
6. nesium in perpetuum.
7. Quod bonum faustum felixque sit Imp. Caeari,
8. divi f., Augusto, p(atri) p(atriae), pontifici maximo, trib(unicia) potest(ate)
9. XXXIII, coniugi, liberis gentique eius, senatui
10. populoque Romano et colonis incolisque

11. C(oloniae) I(uliae) P(aternae) N(arbonis) M(artii) qui se numini eius in perpetuum
12. colendo obligaverunt. Plebs Narbonen-
13. sium aram Narbone in foro posuit, ad
14. quam quotannis VIII k(alendas) ooctobr(es), qua die
15. eum saeculi felicitas orbi terrarum
16. rectorem edidit, tres equites romani
17. a plebi et tres libertini hostias singu-
18. las inmoleandum et colonis et incolis
19. ad supplicandum numini eius thus et vinum
20. de suo ea die praestent[t], et VIII k(alendas) octobr(es)
21. thus vinum colonis et incolis item prae-
22. stent, k(alendis) quoque ianuar(iis) thus et vinum
23. colonis et incolis praestent, VII quoq(ue)
24. idus ianuar(ias), qua die primum imperium
25. orbis terrarum auspicatus est, thure
26. vino supplicent et hostias singul(as) in-
27. molent et colonis incolisque thus vi-
28. num ea die praestent.
29. Et pridie k(alendas) Iunias, quod ea die, T. Statilio
30. Tauro M' Aemilio Lepido co(n)s(ulibus), iudicia
31. plebis decurionibus coniunxit, hostias
32. singul(as) inmoleant, et thus et vinum ad
33. supplicandum numini eius colonis et
34. incolis praestent.
35. Exque iis tribus equitibus Rom(anis) [et tribus]
36. libertinis un[us...]

碑文の冒頭（1-6行目）には、この祭壇が奉献された日時および奉献の主旨が述べられている。コンスル暦⁽¹¹⁾は11年にあたり、日時は9月22日⁽¹²⁾である。紀元11年は後述（29-31行目）のように、その年の5月31日にアウグストゥス⁽¹³⁾がナルボンヌの平民の *judicium*（碑文では *iudicia*）を都市参事会員に結び付けた記念すべき年である（後述）。これに感謝してこの祭壇は奉献されたわけである。9月22日という日付は、アウグストゥスの誕生日（9月23日）の前日に当たっている。

奉献の主旨としては、ナルボンヌの平民がアウグストゥスのヌーメン（*numen*）に対して恒久的な誓約（*votum*）を行うというものである。ここで注目されるのはローマ植民市ナルボンヌの平民

が主体となっているということであり、またその対象がアウグストゥス彼自身ではなく、彼のヌーメンに対してであるということである。

主体としてのナルボンヌの平民ということであるが、これは前述のアウグストゥスの措置が彼らに対して向けられたということに由来している。どのような経緯からアウグストゥスのこのような措置がとられたのかは、このくだりからは判断できないが、それが彼らにとってはきわめて重要なものであったことは明らかである。まさにこの措置はアウグストゥスのヌーメンによってしか解決できないたぐいのものであったのであろう⁽¹⁴⁾。

アウグストゥスのヌーメンについては、ゲローはこの祭壇の祭儀がアウグストゥスの誕生日を中心としていることから⁽¹⁵⁾、ほぼゲニウス (genius)⁽¹⁶⁾と同一視している。しかし彼は、アウグストゥスの晩年に両者の意味の分離が起こり、ヌーメンはより神的な特徴を深めていく、として両者の微妙な意味の差異があることは認めている⁽¹⁷⁾。ここからもわかるように、「ナルボンヌの祭壇」はアウグストゥスの最晩年に設置されており、numen Augusti という表現は、彼が次第に神的な存在になりつつあることを予兆している⁽¹⁸⁾。

次にその誓約 (votum) の内容が明らかにされる (7-12行目)。ここでは、アウグストゥス、その妻、家族および一族、ローマ元老院および市民団、ナルボンヌの植民者および居住者に対して祝福が述べられている。このうちナルボンヌの植民者および居住者はアウグストゥスのヌーメンを永遠に礼拝することを自らに義務づけた人々である。われわれはアウグストゥスの護民官職権34回目という称号から、この碑文の年代 (11/12年) を得ることができる⁽¹⁹⁾。これは冒頭の日付とも矛盾しない。注目すべきは、ナルボンヌの住民を述べるくだりで、植民者および居住者には触れられても⁽²⁰⁾、都市参事会員には言及されていないことである⁽²¹⁾。これはこの祭壇がナルボンヌの平民によって建てられたという事情が反映しているのであろう。

これに続いて、この祭壇が設置されたことが述べられる (12-13行目)。「ナルボンヌの祭壇」の設置場所は、フォーラム (中央広場) のなか (in foro) である。ナルボンヌは属州ナルポネンシスの首都でもあったために、ここは都市の皇帝礼拝の場であるとともに、また属州全体の皇帝礼拝の場でもあった⁽²²⁾。従ってナルボンヌには二つのレベルの皇帝礼拝の場があったことになる。前者の場がフォーラムであり、後者の場が都市の東南部にあった聖域である⁽²³⁾。とすると、「ナルボンヌの祭壇」はフォーラムに設置されたわけであるので、都市レベルの皇帝礼拝の場のなかに置かれたということになる。

この祭壇に対して、礼拝が行われるのであるが、その日はまずアウグストゥスの誕生日である (13-20行目)。アウグストゥスの生誕は9月23日である。その日はここではこの世の幸運 (felicitas saeculi)⁽²⁴⁾が世界の支配者 (rector orbis terrarum)⁽²⁵⁾を生みだした日とされている。この日に礼拝がおこなわれるのであるが、それを担う者たちは、三人の平民指名のローマ騎士 (equites romani a plebi)⁽²⁶⁾と三人の解放奴隷 (libertini) である⁽²⁷⁾。

「ナルボンヌの祭壇」碑文にあらわれる礼拝の担い手の六人が、はたして後のアウグスターレー

スの先駆形態であるかどうか、については議論のあるところである。ゲローは両者は別個のものであり、前者は後者によって駆逐されたと考えている⁽²⁸⁾。しかしながら、後に成立するアウグスターレースの行う皇帝礼拝の場はフォーラムであり、その際恐らくこの祭壇もその礼拝には何らかの重要な役割を果たしたと思われる。というのも、現在われわれが対象としている祭壇は設立当時のものではなく、145年の大火⁽²⁹⁾の後再建されたものといわれている。とすれば、この祭壇はフォーラムのなかで長く存続しており、皇帝礼拝に関する何らかの役割を果たし続けていたと想像される。更に、アウグスターレースが自分達の礼拝を行う際、この祭壇を全く無視したとは考えにくい。従って、「ナルボンヌの祭壇」の担い手はやはりアウグスターレースの成立と何らかの関係をもっていたと考えるほうが妥当であろう⁽³⁰⁾。

アウグストゥスの生誕は、まず生け贄 (hostia) によって礼拝されている。そして更に乳香 (thus) とぶどう酒 (vinum) によって祝われる。ぶどう酒はともかく、乳香は当時容易には手に入らない高価なものである。またぶどう酒はナルボンヌの平民全体 (coloni et incolae) に振るまわれている。それだけにこの礼拝の担い手には大きな財力が要求された。アウグストゥスの生誕は翌日も祝われている (20-22行目)。二日間にわたって礼拝が行われるのは、アウグストゥスの生誕のみである。しかもこの礼拝は各礼拝日の最初に置かれている。いかにこの礼拝がナルボンヌの平民にとって重要なものであったがここから理解される。

第二の礼拝の日は1月1日である (22-23行)。アウグストゥスの生誕のあとは、時間順に礼拝の日があげられている。その最初が年頭の1月1日である。この日は乳香とぶどう酒が平民全体へ振る舞われている。

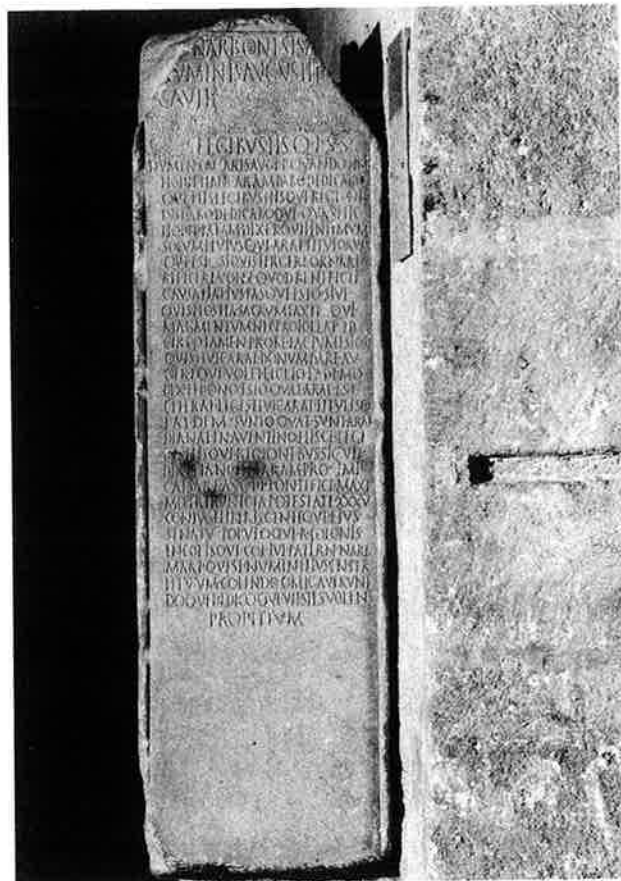
第三の礼拝日は1月7日⁽³¹⁾である (23-28行)。この日はアウグストゥスによる、世界の命令権 (imperium orbis terrarum) が開始された日だからである。前43年1月7日、元老院は19歳のオクタウィアヌスへ命令権 (imperium) を与えている (R.G. 1, 2)。この日がここでは世界 (orbis terrarum) の命令権を与えられた日とされているわけである⁽³²⁾。ただゲローが指摘するところによると、この日付はアウグストゥスの年譜においては、しばしば同年8月19日の最初のコンスル職就任の日付と対比されるのであるが⁽³³⁾、ここでは1月7日しか礼拝の対象とはなっていない。この理由については今のところ明らかにしえない⁽³⁴⁾。

最後の礼拝日は5月31日 (6月1日の前日) である (29-34行)⁽³⁵⁾。「ナルボンヌの祭壇」が建てられた同じ年である11年⁽³⁶⁾のこの日、アウグストゥス⁽³⁷⁾はナルボンヌの平民の iudicium を都市参事会員に結び付けたのである。この iudicium の解釈は難解で、様々な説が出されているが⁽³⁸⁾、筆者はやはり、アウグストゥスの審判人制度改革の一環として位置づけたい⁽³⁹⁾。すなわち、これまでナルボンヌでは、平民は審判人 (judex) から排除されてきたが、この日アウグストゥスは平民の審判人を都市参事会員のそれと結び付けたわけである。この措置はナルボンヌの平民にとってはきわめて大きな恩恵であったために、同年 (11年) のアウグストゥスの誕生日の前日 (9月22日) に、このような恩恵を及ぼし得る彼のヌーメンに対して誓約をおこない、早速引き続いて彼の誕生

日とその翌日の二日間、平民の代表六人によって礼拝を挙行し、それに平民全員 (coloni incolaeque) を参加させることにしたわけである。

以上の礼拝日が列挙されたあと、末尾の文章となる (35-36行)。ここで、「ナルボンヌの祭壇」の正面碑文は終わっている。最後の部分は礼拝を担当する三人のローマ騎士と三人の解放奴隷のなかから一人がなんらかの行事を執り行うのであろうが、それ以上のことはここからは読み取れない。

次に側面碑文を見てみよう (写真②参照)。側面碑文は全部で33行であるが、正面碑文とは文面が若干異なっている。というのも、側面碑文はアウグストゥスへの呼びかけ⁽⁴⁰⁾という形をとっており、彼と直接的なつながりを感じさせる文面になっている。



写真② Cliché Ph.FOLIOT
CNRS Centre Camille-Jullian
MMSH Aix-en-Provence
n°126119

1. [Pleb]s Narbonensis a[ram]
2. numinis Augusti d[edi]
3. cavit.....
4. legibus iis, q(uae) i(nfra) s(criptae) s(unt):
5. Numen Caesaris Aug(usti), p(atris) p(atriciae), quando tibi
6. hodie hanc aram dabo dedicabo
7. que, his legibus hisque regioni-
8. bus dabo dedicaboque, quas hic
9. hodie palam dixero, uti infimum
10. solum huiusque arae titurorum-
11. que est. Si quis ergere, ornare,
12. reficere volet quod beneficii
13. causa fiat, ius fasque esto; sive
14. quis hostia sacrum faxit, qui
15. magmentum nec protollat, id-
16. circo tamen probe factum esto; si
17. quis huic arae donum dare au-
18. gereque volet, liceto, eademq(ue)
19. lex ei dono esto, quae arae est;
20. ceterae leges huic arae titulisq(ue)
21. eadem sunt, quae sunt arae
22. Dianae in Aventino. Hisce legi-
23. bus hisque regionibus, sicuti
24. dixi, hanc tibi aram pro imp(eratore)
25. Caesare Aug(usto), p(atre) p(atriciae), pontifice maxi-
26. mo, tribunicia potestate XXXV,
27. coniugi, liberis genteque eius,
28. senatu populoque Romano, colonis
29. incolisque Col(oniae) Iul(iae) Patern(ae) Narb(onis)
30. Mart(ii), qui se numini eius in per-
31. petuum colendo obligaverunt,
32. doque dedicoque, uti sies volens
33. propitium.

まず冒頭では、この祭壇の建設の主旨が述べられている(1-4行)。ここでは、正面碑文と同様、ナルボンヌの平民がアウグストゥスのヌーメンに対して祭壇を奉献したことが述べられている。そしてその奉献は以下の碑文に記されているような規定に則っていることが明らかにされる。

次にはこの祭壇の奉献の対象およびこの祭壇に関わる規定が述べられている(5-11行目)。奉献の対象としてはアウグストゥスのヌーメンがあげられるが、その際注目しなければならないのはヌーメンにかかる付加形容辞(エピテトン)である。上述の2行目では *numen Augusti* となっているのに対して、5行目では *numen Caesaris Augusti* そして更に *patris patriae* が付加されている。これは何を意味しているのだろうか。もし *numen Augusti* が用語上定着しているものであれば、おそらくそれが繰り返されたであろうと思われるが、このような言い替えが行われているところを見ると、いまだこの時点では *numen Augusti* という表現は固定的なものではなかったと言えるのではなかろうか⁽⁴¹⁾。

祭壇の維持・管理についても触れられている(11-19行目)。この箇所では、祭壇の維持・管理について詳細な規定が述べられている。ここからわれわれは、この祭壇が以後ナルボンヌの平民によって恒久的に受け継がれていったであろう様子をうかがい知ることができる。

また「ナルボンヌの祭壇」碑文のモデルになったものについても触れられている(20-22行目)。この箇所から、われわれは明確に「ナルボンヌの祭壇」碑文が、単独ではなく共通のモデルを基にして造られたことを理解する。すなわちローマのアウェンティヌス丘にあるディアナの祭壇である。この祭壇の法(*lex arae*)はローマ世界の平民たちにとって規範となるものであった⁽⁴²⁾。因みに、ゲローは2世紀前半(137年)のダルマティアの都市サロナエ(CIL III, 1933)においても、この法が典拠となっている事実を指摘している⁽⁴³⁾。

末尾ではアウグストゥス以下、被奉献者が列挙されている(22-33行目)。ここで注目されるのは、アウグストゥスの称号のなかで護民官職権の回数35回目(26行目)⁽⁴⁴⁾という数字である。上述の正面碑文では34回目(9行目)とあり、両者には1年の間隔がある。これは何を意味するのであろうか。ゲローによれば、ナルボンヌの平民が、アウグストゥスのヌーメンに対する礼拝を祭壇碑文という形にするためには、誓約(*votum*)を行った後、ローマへの報告とその承認に一年間を要したのではないかと指摘している⁽⁴⁵⁾。筆者もこの説を支持したい。

これまで、「ナルボンヌの祭壇」碑文をみてきたわけであるが、それによってわれわれは、アウグストゥス生前の11年に、彼のヌーメンに対して、ナルボンヌの平民による礼拝が誓約され、翌年確立された事実を知ることができた。しかもこの礼拝は、アウグストゥス自身に対するものではなく、あくまでも彼のヌーメンに対するのものであり、したがって、アウグストゥスのよって立つ地位によって生じたものではなく、彼の業績によって生じたものであった。つまり、その成立の契機は

アウグストゥスのナルボンヌの平民に対する一種の恩恵（beneficium）によるものであった。このことによって、ナルボンヌの平民は自分たちの代表（三人のローマ騎士と三人の解放奴隷）を通して、アウグストゥスのヌーメンに礼拝をおこなった。従って、この礼拝は下からの、自然発生的な礼拝が契機となったといつてよいであろう。

このように礼拝は一見自然発生的とみえるわけであるけれども、しかしながらそこにはアウグストゥスの政治的意図が隠されているように思われる。平民の下からのアウグストゥスに対する自然発生的な礼拝をうまくすくい上げているようにも見える。というのもアウグストゥスは、平民の有力者をローマ騎士にとりたて、また彼らとともに解放奴隷の富裕者を自分のヌーメンの礼拝に参加することを許可することによって、彼らを社会的に認知させており、そのことで彼らの関心を自己に引きつけているからである。また彼のヌーメンの礼拝への誓約を記す正面碑文と彼からの認可による礼拝の確立を示す側面碑文の間には一年間のタイムラグがあるわけであるが、この祭壇の作成時間を考えると実際はもっと短かったとも思われ、アウグストゥス側の対応の速さが推測されるのである。

従って、この礼拝の直接的契機である、ナルボンヌの平民の*judicium*を都市参事会員に結びつけるというアウグストゥスの措置は、おそらく平民の自分に対する感謝およびそこから発する何らかのオマージュをあらかじめ計算したものである。それ故、平民がアウグストゥスのヌーメンに対して礼拝を捧げる行為は勿論、平民のイニシアティブで生じたものであるが、しかしその制度化についてはあきらかにアウグストゥスの意向が反映していたと思われるのである。その意味で、Ara Narbonensisはナルボンヌの平民とアウグストゥスとの合作といわねばならないだろう⁽⁴⁶⁾。

註

- (1) ナルボンヌの古代史については以下を参照。M. Gayraud, *Narbonne Antique des origines à la fin du IIIe siècle*, Paris, 1981. なお帝政期の2世紀に首都がナルボンヌからニームに移転したという説を唱えるものに以下がある。A. Grenier, préface, dans H.-G. Pflaum, *Les Fastes de la Province de Narbonnaise*, Paris, 1978, IX-XII.
- (2) Cf. CIL XII, 4335. そのレプリカはかつてのフォルム近くにある地下貯蔵庫博物館（Horreum Romain）入り口の中庭に展示されている。この祭壇はその銘《Pax Aug(usti)》が《Pax Augusta》（「アウグストゥスの平和」）というよく知られた表現とどのように関連するか、という興味深い問題を提起するが、いまのところ筆者にはそれを論じる用意はない。
- (3) Cf. CIL XII, 4333 = ILS, 112. この祭壇は、M. ゲローによれば、1564年ないし1566年、ナルボンヌのポルト・ロワヤルか、あるいはベジエ門の近くで、囲壁工事の際発見されたものである。高さが1,11mあり、厚さは0,25mである。Cf. M. Gayraud, *op. cit.*, p. 358.

- (4) 現在のピスタン広場 (Place Bistan) がその一角である。現在そこに置かれている石柱をのぞけば、ここがかつてのフォーラムの一部であったことを偲ばせるものは何もない。
- (5) ヌーメンについては、毛利晶氏よれば「非人格的な神の持つ力及びこの力による作用の現れ」ととらえる説と、「人格的な神的存在から発する力に満ちた働き」ととらえる説があるという。筆者は後者をとることにする。以下を参照。Walter Poetscher, 'Numen' und 'numen Augusti', in: *ANRW* II.16. 1 (1978), SS. 355-392; 毛利晶「所謂「アウグストゥスによるラレス祭儀の改革」とローマのウィーコマギステル」『史学雑誌』第100編第3号 (1991年) 1-35頁、特に註5参照。
- (6) 拙稿「Ara Narbonensis 碑文 (CIL. XII 4333) をめぐって—P. KneisslとM. Gayraudの所説を中心に—」『史学論叢』(別府大学史学研究会) 第21号 (1990年) 105-116頁。
- (7) 例えば最近のD. Fishwickの研究を参照されたい。Cf. D. Fishwick, *The Imperial Cult in the Latin West*, Vol.III Part One (Institution and Evolution); Part Two (The Provincial Priesthood), Leiden / Boston / Köln, 2002.なおナルボネンシスにおける最近の皇帝礼拝研究については、『ナルボネンシス考古学雑誌』(Revue Archéologique Narbonnaise) 第32号 (1999年) 1-63頁を参照。
- (8) ここでナルボンヌにおけるローマ皇帝礼拝の成立を問題とする意味について述べておく。首都ナルボンヌを擁する属州ナルボネンシスは元老院属州に分類される。元来ローマ皇帝礼拝の西部属州における成立という問題を取り上げる場合、元首属州と元老院属州とは明らかにその様相を異にしている。というのも元首属州の場合、皇帝礼拝の導入は早期にいわば上から一挙になされるのに対して、元老院属州ではそれと異なり段階的な過程をたどるからである。その意味で、ナルボネンシスの首都ナルボンヌの事例はわれわれに元老院属州におけるローマ皇帝礼拝の成立に関する一つの具体像を示すように思われる。
- (9) ナルボンヌで出土した全ての碑文の写真のネガは、現在エクスにあるカミーユ・ジュリアンセンター (CNRS Centre Camille-Jullian) の写真資料室 (Photothèque) に収められている。
- (10) 正面碑文は時間的に右側面碑文よりも一年先行している (後述)。なお碑文の解説・補読はM.ゲローによる。Cf. M.Gayraud, *op. cit.*, p.358f.
- (11) コンスルは T. Statilius Taurus と L. Cassius Longinus。
- (12) 碑文の表現では10月1日から10日前の日。
- (13) 30-31行目には明記されていないが、通例アウグストゥスが理解されている。Cf. M. Gayraud, *op. cit.*, p.362; P.Kneissl, Entstehung und Bedeutung der Augustalität, in: *Chiron* X (1980), SS.291-326, ins. S.301.
- (14) クナイスルは、ナルボンヌにおいて平民と都市参事会員とのあいだに深刻な確執があり、それを調停したのがアウグストゥスの裁定であったという説を提起しているが、史料の根

- 拠が明確ではなく、説得力に欠ける。Cf. P.Kneissl, *op. cit.*, S. 308.
- (15) 14-16行目にみえるように、アウグストゥスの誕生日はこの祭祀の最初に位置づけられ、しかも二日間にわたって行われることになっている。
- (16) ゲニウスとは、毛利晶氏によれば「もともと男性の体内で活動し、家族の維持を司る生殖力を神化したもの」であり、「後に意味が拡がり、男性の全人格を反映、表現するようになった」。そして「ゲニウスの祭日は、それが保護する個人の誕生日」である。毛利晶「古代ローマの宗教における神と人」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ』河出書房新社1988年、462頁註(6)参照。
- (17) M. Gayraud, *op. cit.*, p. 363; Cf. R. Etienne, *Le culte impériale dans la péninsule ibérique d'Auguste à Dioclétien*, Paris, 1974, p. 314-316.
- (18) Cf. W. Poetscher, *op. cit.*, SS.387-392.
- (19) D.キーナスト (Kienast) によれば正確には、11年6月26日から12年6月25日の間の一年間。Cf. D. Kienast, *Römische Kaisertabelle Grundzüge einer römischen Kaiserchronologie*, Darmstadt, 1990, S.66.
- (20) P.クナイスルは *coloni incolaeque* を平民と同一視している。P. Kneissl, *op.cit.*, S. 296.
- (21) 後述のように、おそらく同じモデルから造られたと思われるサロナエの碑文 (CIL III, 1933) では、*colonis incolis* の直前に *decurionibus* が記されている。
- (22) Cf. D. Fishwick, *op.cit.*, pp. 254-256.
- (23) この聖域に隣接してナルボンヌの円形闘技場があった。現在その周辺には中層所得者用住宅(HLM)が建設されており、地表にその痕跡はみられない。
- (24) Cf. G. Wissowa, *Religion und Kultus der Römer*, München, 1912, S. 267 n. 3.
- (25) 最近、C.アンドー (Ando) はこの表現から、当時のローマ人の世界観を探ろうとしている。Cf. C. Ando, *Imperial Ideology and Provincial Loyalty in the Roman Empire*, Berkeley / Los Angels / London, 2000, p. 321.
- (26) "a plebe"の解釈にはさまざまな説 (Cf. P. Kneissl, *op.cit.*, SS. 297-300) があるが、ここでは Ch.ニコレ (Nicolet) の説をとる。Cf. Ch. Nicolet, L'inscription de l'autel de Narbonne et la "commendatio" des Chevaliers, dans *Latomus* 22, 4 (1963), p. 721-732, spéc. p. 731.
- (27) P.クナイスルはこのモデルをデロス島の *magistri Mercuri* に求めている。彼らの人員は六人であり、三人の自由人と三人の解放奴隷で構成されていたからである。更にクナイスルは彼らこそが後のアウグスターレースの原型であるとみなしている。Cf. P. Kneissl, *op. cit.*, S. 308,318; R. Duthoy, Les Augustales, dans *ANRW* 16. 2 (19-78), p.1254-1309.
- (28) M. Gayraud, *op. cit.*, p.363f.
- (29) SHA, Ant. Pius 9, 2: et Narbonensis civitas et Antiochense oppidum et

Carthaginiense forum arsit.

- (30) 前稿拙稿(註(6)参照)では、具体的な関係を認めてはいなかったが、ここではやはり認めざるをえない。
- (31) 碑文の表現では1月のIdus(13日)より7日前の日。
- (32) 上述のアンドーの指摘するようにこのような表現から、当時の人々の世界観が読み取れるのかも知れない。註(25)参照。
- (33) Cf. M. Gayraud, *op.cit.*, p. 362 n. 327.
- (34) この選択はナルボンヌにイニシアティブがあったというよりもむしろ、この祭壇碑文のモデルがローマにあったと推測されるので(後述)、ローマの事情と密接な関係があったように思われる。
- (35) この部分は碑文のなかで、特別な位置を占めている。というのも碑文の写真版(写真①)からもわかるように、この部分はこれまでの箇所とは別個のものとして、行をあらためて書かれている。すなわち、これまでの叙述はこの碑文のモデルとなったものをそのまま引き写したであろうのに対して、この部分はナルボンヌに特有のものであるために、これまでの部分とは切り離して書かれたものと思われる。
- (36) 11年のコンスルの一人は、M' Aemilius Lepidus から L. Cassius Longinus へ代わっている。
- (37) 註(13)参照。
- (38) iudicium についての学説整理は以下を参照。Cf. P. Kneissl, *op. cit.*, SS.301-306.
- (39) Suetonius, *Augustus*, XXXIIにみえる審判人制度改革。これに対して、島田誠氏は「Suet. Aug. XLVI の伝える都市推薦の騎士級選出の手続きに関する記述」ととらえている。島田誠「元首政期のローマ市民団と解放奴隷」『史学雑誌』第95編第3号31頁註26参照。
- (40) 碑文中に tibi (汝へ) という語が現れている(5行目、24行目)。
- (41) この意味では numen Augusti を genius Augusti とほぼ同一視するゲローの理解は受け入れられる余地がある。註(10)参照。
- (42) lex arae Dianae in Aventino については、G. Wissowa, *Religion und Kultus der Römer*, München, 1912, S. 39.
- (43) M. Gayraud, *op. cit.*, p. 365.
- (44) 12年6月26日から13年6月25日までの一年間。Cf. D. Kienast, *op.cit.*, S. 66. M. ゲローは12年7月1日から13年6月30日の一年間としているが、ここではキーナストの説をとる。Cf. M. Gayraud, *op.cit.*, p.361.
- (45) M. Gayraud, *op.cit.*, p.364.
- (46) 前掲拙稿では、ナルボンヌの平民の下からの自然発生的な礼拝という観点から Ara Narbonensis をとらえたわけであるが、しかし今回あらためて碑文を検討してみると、ア

ウグストゥスの側からの積極的働きかけも重要なモメントであることを読み取らざるをえない。近年皇帝礼拝の成立に関して、アウグストゥスの積極的役割を指摘する説が出てきているように思われる。Cf. D. Kienast, *Augustus: Prinzeps und Monarch*, Darmstadt, 1999, SS. 245-260.

〔付記〕

碑文写真の掲載にあたっては、エクスフランス国立科学研究センター (CNRS) 「地中海館」 (Maison Méditerranéenne) のなかにあるカミーユ・ジュリナンセンター (Centre Camille-Jullian) のご好意とご協力を得た。仲介の労を取られた同センターのミシェル・ジャンン (Michel JANON) 教授にお礼を申し上げたい。

Révision d'Ara Narbonensis (CIL XII, 4333)

En révisant les inscriptions de la face principale et la face latérale d'Ara Narbonensis, j'ai expliqué que cet autel était construit non seulement par le culte spontané des plebs de Narbonne à numen Augusti, mais aussi par l'intervention positive d'Augustus aux plebs de Narbonne. En ce sens Ara Narbonensis est le résultat de l'action mutuelle entre les plebs de Narbonne et Augustus. A mon avis, la formation du culte impériale à Narbonne n'était pas le phénomène unilatérale, mais le phénomène réciproque des plebs et d'Augustus.

YAMAMOTO Haruki

Université de Beppu(JAPON)

* Je suis très reconnaissant à M. Michel Janon des photos d'Ara Narbonensis.